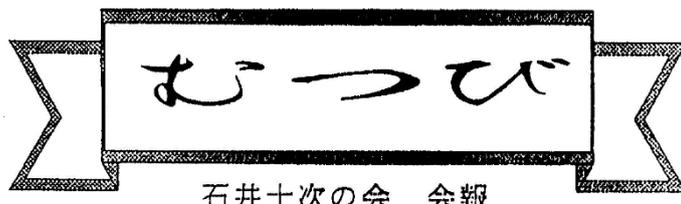


2023年
(令和5年)
8月10日



311号

経営者である十次の精神を今の私に

野菜フルーツ市場
びっくり西都！いろどり
代表取締役 宇田津 真理子

私は3年ほど前まで石井十次資料館・方舟館に勤めておりました。
その仕事を離れても石井十次のことは何十回もいや何百回となく思い出します。
なぜ今でも石井十次のことを思い出すのか・・・その胸の内をこの原稿の中で話せたら・・・。

方舟館勤務を退いて今、私は西都市内で農産物直売所「びっくり西都！いろどり」の代表をしております。

代表ですので「経営」をしなければならない立場です。会社の経営は全く未知のことであり自分の判断だけで舵取りをしないといけません。しょっちゅう壁にぶつかっています。

壁にぶつかるたびに石井十次のことを思い出します。そして考えます。

十次の少年時代・青年初期は挫折の連続です。

でも、良き指導者（例えば、^{おぎわら ど ど へい}荻原百々平など）に恵まれ改心をし、さらには医学の道から孤児を助けることに覚悟をきめ孤児院を設立します。

ここで孤児たちに教育をしていくわけですが、当然、生活していくためには食事を欠かすことはできません。ただ、十次自身も食べるものもなく孤児たちにはおかゆという悲惨な状況にも陥ります。

壁にぶつかった時に自分をどう奮い立たせたのか。自分との闘いにどう向き合っただけという行動に出たのか。

その十次の生き方や熱意は、日記・自戒自記などから理解することができますが、経営者としての十次にも私は強く惹かれます。

確かに時代背景も市民生活も教育も自然も十次が生きた頃と現在は大きく違うけれども、経営難だった孤児院をどう立て直したのか、強い関心があるところです。



石井十次コーナーのある店内
(写真は筆者)

孤児院の経営と私の立場とを交錯させて考えてみます。

十次は事業家としてもいろいろなことをしています。

具体的には、海運業、高鍋製糸株式会社、日州活版所、理髪所、精米所、日向銀行、日向肥料株式会社、上江株式会社・・・等々です。

しかし、成功した事業ばかりではなくリスクを負い借金をかかえることになったことや裏目に出してしまったこともたくさんありました。

そのぶん重い病にも幾度となく罹患し、生死をさまようこともあり孤児院の継続と運営においては苦難困難が次から次へとやってきます。

支援者もあります。忠告もあったわけですが、それを聞き入れたのか否か・・・。

1200名もの孤児を救い、国から表彰を受け、宮内省からの支援を得た十次。その時、十次は何を思い何を考えて次なる行動に出たのか・・・と、またまた考えてしまうのです。

孤児を救わずにはいられない、自分のことより他人のことをと、居ても立ってもいられない性分ではなかったかと想像します。

人は頭で考え、「こうした方がいいんじゃないか」「こうやったら、人はどう思うだろうか」など雑念や迷いの多いことがあるものです。

十次は、「思い立ったら居ても立ってもいられない」純粋な人物だったと思います。そして、その集中力たるや、誰をも魅了する人ではなかったのか、と。

日本の社会には元来、地域の中でお互いに手を携え年齢や障害の有無を超えて支えあった歴史があります。

十次も「事業を興して郷里を活性化させ、時代遅れの風習を改良して人々を幸福にしよう」と、自活的孤児院事業と郷土振興事業をリンクさせて考えたのではないか。

そこに、「地域への貢献・地域からの貢献」を感じます。

そこに、無私の精神で教育を行い経済成長に貢献してきた日本人ならではの精神文化をみるのです。

私は、経営者としての十次を思い出すたびに、その教えに幾度となく勇気づけられます。原点に帰してくれるのです。また一歩前に踏み出す実践に背中を押してくれるのです。

十次の最大の支援者であった大原孫三郎は十次を次のように評しています。

「根本の精神は、主義が一貫し、改めることにも大胆で何事にも革新をもって実行に忠実」と。

私も経営者のひとりとして、大原評の十次の生き方に学び続けたい。

さらには経営者としての十次をさらに理解し続けたい。

経営者である十次の精神を今の私に。

これからも石井十次を忘れない・・・。

『 新たなスタートに向けて！ 』

今年度より、宮崎市の支部長を務めさせて頂く事になりました、鳥居かおりと申します。

私は令和2年9月に、信頼する知人より紹介された事がきっかけで、この“石井十次の会”に入会しました。

入会してすぐに前事務局長より役員を勧められ活動に参加する様になり、そのおかげでこの“石井十次の会”の尊さと素晴らしさを知る事となりました。

また、ボランティア活動をされている方達は本当に明るく素敵なお方ばかりで、とても有難い御縁をたくさん頂き楽しく活動しています。

私のスタンスは、『まず何事もやってみる！』です

これこそが、石井十次という偉人がされてきた事だと感じています。

ですので、支部活動もチャレンジ精神で新しい事に、入った年月や役職に関係なく、宮崎支部みんなの知恵や経験、アイデアを大切にチームワークで取り組みたいと思っています。



宮崎支部総会に参加の方々

6月に宮崎支部の総会を行いました。沢山の方々にご参加いただき、その後の懇親会も話が盛り上がり、とても楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

そして、その中から3名の方が、私たち役員の仲間に入ってくれました。

また、遠方より本部の副会長や西諸支部の方々にもご参加していただき、本当に有難く感謝申し上げます。

私はこれからは、宮崎支部単独でなく各支部の皆様と連携を深めて、この“石井十次の会”の発展に貢献することがとても重要だと考えています。

楽しい所に人は集まると言います。まず、宮崎支部の私たちが楽しんで活動して行こうと思っています。そして、宮崎市・綾町・国富町在住の“石井十次の会”の会員さんは宮崎支部の会員さんでもあります。“石井十次の会”に入会されている方は、きっとそれぞれの思いと気持ちのある方だと思います。ぜひ、私たち役員の仲間に入り一緒に活動されませんか？

「自分にできる事があれば協力したい」「楽しい仲間に入りたい」など、少しでもご興味のある方はご連絡いただくと嬉しいです。

これからも“石井十次の会”の活動を通し、新しい人間関係や知識や経験を得て、私自身も人として成長していきたいと思っています。

どうぞ、よろしくお願い致します。

石井十次の会 宮崎支部
鳥居かおり (Tel 090-4774-4144)



石井十次の会

SINCE 1997
— 宮崎支部 —

孤児を送り届けよ ～ 鉄道職員の心あたたまる連携プレー ～

以下に紹介するエピソードは、岡山孤児院日誌に記録された、孤児たちを無事に送り届けるために鉄道職員たちが職責を超えて行った連携プレーの物語です。

明治37年11月、岡山孤児院は山形県米沢市から幼い2人の孤児を受け入れることになりました。8歳の姉と6歳の弟です。孤児の世話をしてきた米沢市の篤志家は米沢駅長に、幼い姉弟を鉄道で何とか無事に岡山まで送り届けてほしいと頼みました。

頼みを受けた米沢駅長はただちに動きました。彼は途中の駅長に対し依頼状を書きました。

「孤児ノ姉弟ハ、今回当市慈善家諸君ノ尽力ニヨリ備前国岡山市孤児院へ入院スル事トナリタルモ、姉ガ8歳、ソノ弟ハ6歳ノ小児トテ、長距離旅行ノ至難ナル、実ニ思ヒ遣ラル義ニツイテ、途中ハ夙ニコノ業界各位ノ涙情的御保護ヲ仰ギ、目的地ニ達セシメザル可カラザルモノ、何卒左様御世話下サレタク、ヒトエニ願ヒアゲ奉リ候」

米沢駅長は具体的な支援内容として4項目を挙げました。

- ・孤児の携帯金銭は車掌が預かり、乗り替え駅で前途の車掌に引き継いでほしい。
- ・中断なく汽車旅行をさせたいが、列車時刻の関係上、途中宿泊する場合は、当該駅長にて宿舍の世話をしてほしい。
- ・なるべく車掌のいる車両に乗車させ、終始世話をしてほしい。
- ・乗り替え駅では車掌が乗車券の買い替えや食事の世話をしてほしい。

孤児姉弟の乗った列車の車掌や通過駅の駅長はこの要請に応えました。南福島駅では、待ち時間中に孤児を見た慈善家が駅長の了解を得て、孤児を自宅に招き食事を与えてくれました。福島駅長は有志者が集めた義捐金4円3銭を預かり、50銭を小出しの旅費として車掌に託しました。品川駅長は、品川から岡山までの三等子供切符の運賃を差し引いた残りの10円36銭を、新橋機関区の専務車掌に託しました。神戸駅では糸崎機関区の車掌が世話を引き受け、車内の慈善家の義捐金を預かり、弁当を買い与えました。こうして孤児姉弟は、11月4日、無事に岡山駅に到着しました。

当時、岡山孤児院は全国から孤児を受け入れていましたが、孤児の汽車の旅にはこうした鉄道職員の献身的な協力があつたのです。

参考：岡山孤児院日誌 明治37年11月（編集委員 石川正樹）

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】甲斐 攝子 谷口 ゆかり 【西都市】福島 博子

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【都城市】津曲 利幸 【日向市】富山 栄子 【西都市】那須 政治

【木城町】松本 文勝

★9月号の通信発送作業は 9月13日（水）14日（木）いずれも9時からです

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

〒884-0102宮崎県児湯郡木城町大字椎木644-1
社会福祉法人 石井記念友愛社後援会
石井十次の会

TEL/FAX 0983-32-4612

メール yuuaisya-jyuujinokai@ki.jo.jp

編集後記

●巻頭言には宇田津真理子様から玉稿をいただきました。感謝いたします。石井十次コーナーのある店「いろどり」の経営者として、壁にぶつかる度に十次の孤児院経営に学ぼうとしておられる宇田津様の姿勢に感銘を受けると共に、心から声援を送ります。（編集委員 石川正樹）